

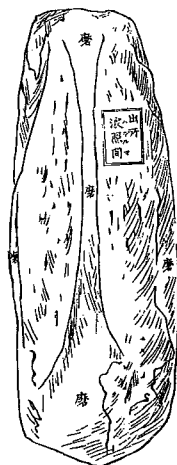
波照間島の考古学

當 眞 嗣 一

A. 戦前の調査

戦前、考古学的発掘調査のため波照間島に渡った考古学者はいなかった。しかし、波照間島で採集された考古学上の遺物については早くも1894年（明治27）に東京の人類学会雑誌に発表されている^①。それは、首里出身の西國男が採集した石斧を鳥居龍蔵が報告したものである。鳥居は、『東京人類学会雑誌』に「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」を載せ、その冒頭のなかで「日本ノ西端。琉球ニ石器時代ノ遺跡アラントハ吾人ノ深ク信ズル所ナリ」と述べている。鳥居は、西が持参した石器を実見することによって八重山の島々に石器時代人が存在していたことを確信したわけである。

上京の際、西が持参した石器は石斧4点であった。そのなかに波照間島で採集した石斧が1点含まれていたのである。鳥居の論文のなかに掲載されている石斧の特徴を見ると、局部磨製の片刃石斧で胴部断面が三角形を呈している石斧である（第1図）。採集された場所についての記述はない。鳥居との面談のなかで西は八重山の石垣島・西表島・黒島・新城島・小浜島・波照間島で石器が発見され、これらの諸島中最も石器を多く得たのは波照間島であったことを鳥居に伝えている。



第1図 鳥居龍蔵の「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」に掲載されている波照間島採集の局部磨製の片刃石斧（同論文より掲載）

B. 「南島文化の総合調査」の一環としての金関チームの調査

波照間島での本格的な考古学上の調査は、1954年（昭和29）に金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文らが行った下田原貝塚の発掘調査が最初である。この調査は戦後県内で最も早い時期に行われた考古学上の調査で、南西諸島における考古学研究の出発点になった記念すべき調査となった。調査は柳田国男が主宰する「南島文化の総合調査」の一環として実施されたものであるが、この島が特に調査対象地として選ばれたのは、「波照間島が八重山諸島の最南域に属し、台湾本島の東北岸に近接している島でありながら、これまで何らの調査が行われていなかった^②」からであった。

金関を団長とする調査団一行は、1954年（昭和29）3月18日の夕刻島に上陸した後4月6日に島を離れるまで僅か3週間足らずの間に島内の考古学的踏査を勢力的に押し進め考古学上大きな成果を挙げる事ができた。金関はこの調査の成果を踏まえて「八重山群島の古代文化」という論文を発表している^③。この論文には「宮良当壮博士の批判に答う」という副題が付けられているが、それは波照間島調査の際、金関が『朝日新聞』の西部版に寄せた「琉球通信^④」のうち波照間島の名称や琉球語の起こりのことについての考え方を宮良当壮が批判したことに対する反論という形で発表されたものであった。両者の間にやがて言語学者の服部四郎が加わることになり、琉球人のルーツをめぐる「起源論争」として発展したことは有名である。本文に関係する部分についての金関の主張を抄録すると、「八重山先史時代には、縄文式、弥生式の文化は波及していない。そこにはこれら二文化とは別の漁労と組立式造船技術を伴う独自の農耕文化があった。その文化は現代の八重山文化の祖型と考えられる^⑤」というものである。

ところで、考古学上の発掘調査概要については、調査を行った1954年（昭和29）秋の人類学民族学大会で金関・国分によって報告^⑥されたが、正式な報告書についてはそれより10年遅れて1964年（昭和39）になって刊行された。いま、報告書の内容を要約すると次のとおりとなる^⑦。

- ①下田原貝塚の発掘調査に主力が注がれたのは、島内で下田原貝塚が最も古くて遺物包含層も保存良好であること、また、この地区の海浜には船着き場としての適地や台地縁に泉地が存在し、且つ西表島が手にとるように望見できる場所にあること、さらにこの地区には民俗上の聖地が多く歴史の上で重要な意味を暗示していると判断したからである。
- ②遺物包含層の状況については1層が黝黒色土層で耕土、2層は暗褐色土層で旧耕土、3層は混貝土層で下田原期の文化層、一番下は基盤の赤褐色粘土層である。
- ③下田原貝塚土器は八重山先史時代土器、高宮廣衛教授の所謂Lug-Pottery（外耳土器）初期のものである。
- ④土器が出土しない仲間第一貝塚とは耨器と見られる刃部に磨研を加えた局部磨研石器を主体とすることで共通する。
- ⑤下田原貝塚は西表島初期の有土器遺跡である仲間第二貝塚の時代に波照間島に営まれたコロニーである。
- ⑥波照間台地縁の下田原地区の印文硬陶系土器が台湾本島北部海辺地方のそれと酷似することは、波照間島と台湾本島、特にその北東海岸地方との間に何らかの交渉があったことを暗示する。
- ⑦横耳形の把手を口縁に有する土器は台湾南部東海岸地方の先史土器にみられ波照間島の土器と酷似するが、台湾南部沿岸地方の把手には紐を通す孔が開けられているのが

普通である。

- ⑧サルボウの殻頂部に穿孔した貝器は台湾西海岸南部の先史時代に例があり、現代も網の錘として利用していることは共通する。また、同じ貝製品でヤコウガイの蓋を利用した刃器は台湾先史時代の火烧島や恒春半島の先史時代にもみられる。

以上であるが、この調査によって波照間島先史時代の様相が初めて明らかにされた。

C. 多和田真淳の調査

金関チームの一員として下田原貝塚の発掘調査に参加した多和田真淳は、独自に先島地方を踏査した結果と下田原貝塚の調査を踏まえながら、八重山古代文化についての見解を発表した^⑧。そのなかで氏は「下田原貝塚系と石垣島の川平貝塚系の二つに大別することが出来前者は古く、後者は新しい」とし、そして「下田原貝塚は石器の形により農耕時代の貝塚」であるが、陶磁器の混在がないので川平貝塚系の遺跡よりは古いが琉球縄文系の貝塚よりは新しいという考え方を提示した。

現在の考古学上の成果では、下田原貝塚の実年代については今からおよそ3千数百年前を示し、川平貝塚系外耳土器が出土する遺跡はおおむね沖縄のグスク時代に相当することが判明している。多和田が提示した考えは、八重山古代文化における実年代の捉え方や無土器時代の設定がないことでは今日の成果に遠いものの、下田原貝塚系を先史時代に、川平貝塚系を原始時代に比定したことでは卓見というべきであろう。

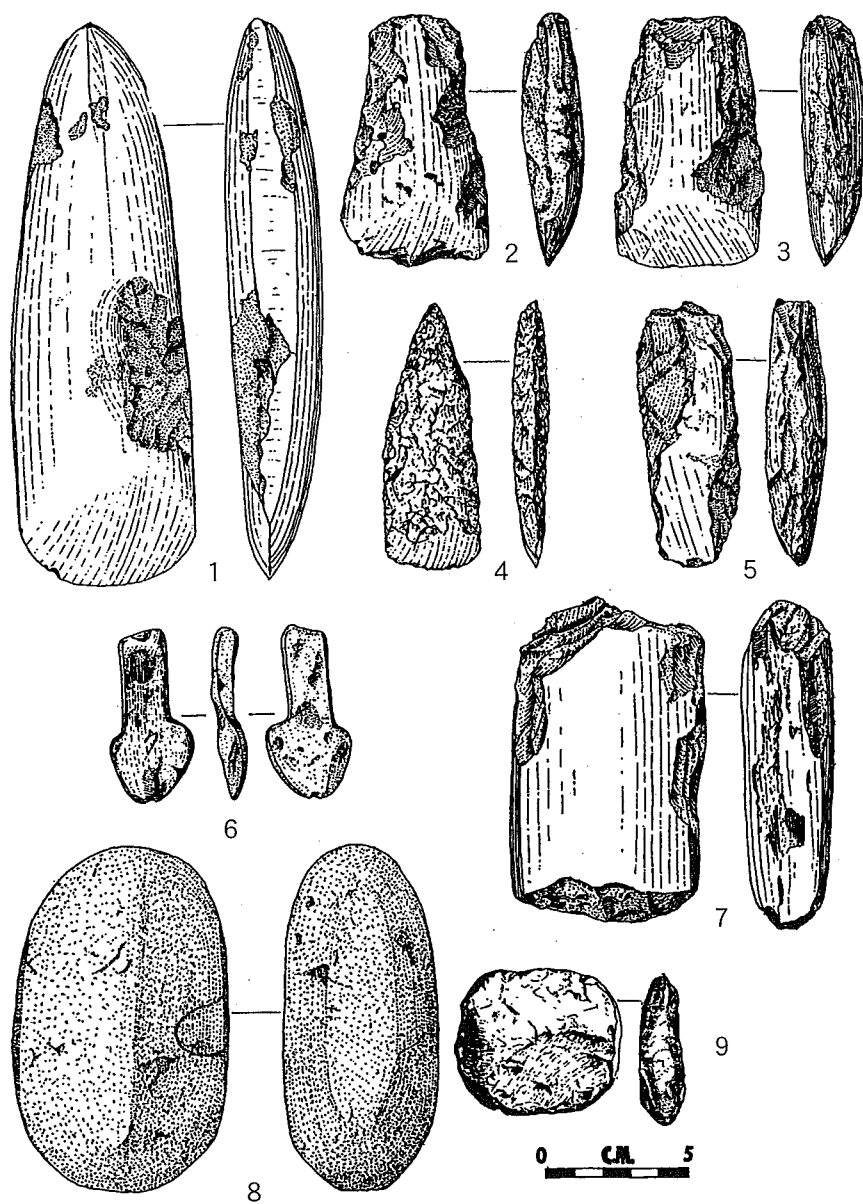
D. 早稲田大学の八重山調査団による波照間島調査

滝口宏を団長とする早稲田大学八重山調査団は、1959年（昭和34）に波照間島下田原貝塚の試掘調査を実施し、翌1960年報告書を刊行している^⑨。その調査成果を概観すると次のとおりとなる。

- ①発掘調査期間は1959年の8月14日～18日の5日間であった。
- ②発掘場所は金関チームが1954年に行った場所から北東へ約30m下った山田均氏所有の畑地である。この畑に東西10m、幅1.5mの主トレンチ（Eトレンチ）とその他の地点にもA～Dの小トレンチを設けて発掘した。
- ③トレンチの層序は、耕土10～15cm、暗褐色土に貝殻の混じる遺物包含層が20～50cmである。その下位は暗褐色土層が30～40cmと続きやがて岩盤となった。
- ④自然遺物は貝類、魚類、爬虫類、哺乳類等である。哺乳類にはジュゴン、イノシシがあり、特にイノシシの遺存骨は多量に出土した。岩石のなかでは、砂岩質の偏平な石が焼けて赤味をおびたものが多量に発見された。おそらく石蒸し料理用のボイルストーンであろう。

⑤人工遺物は石器、貝製品、土器等である。

石器は発掘によって8点得られ、うち6点が石斧である。半磨製と磨製にわけられるが、半磨製が多い。報告書に掲載された実測図（第2図）と観察表を記すと次のとおりである。

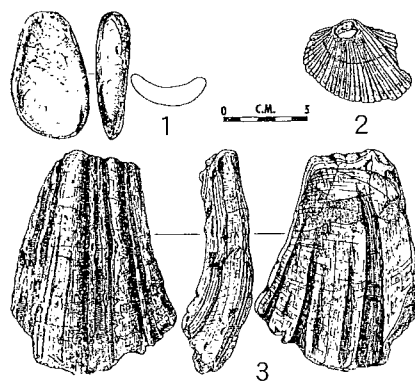


第2図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の石器
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)

挿図	製 作	刃部形態	最大長	最大幅	最大厚	石 質	出土地点	備 考
第2 図1	定角型 磨 製	両刃状	194cm	61cm	33cm	角 閃 片 岩	三区 混貝土層	完形品
同図 2	半磨製	片刃状	87cm	50cm	21cm	不 明	四区 混貝土層	完形品
同図 3	半磨製	片刃状	88cm	51cm	20cm	ラン閃 石片岩	五区 混貝土層	完形品
同図 4	半磨製	両刃状	92cm	33cm	13cm	輝緑凝 灰 岩	五区 混貝土層	再生品 ?
同図 5	半磨製	両刃状	—	33cm	21cm	ラン閃 石片岩	五区 混貝土層	破損品
同図 6	篋状石器		—	—	—	砂岩質	一区 貝層	完形品
同図 7	半磨製	両刃状 刃部形態	—	67cm	32cm	輝緑凝 灰 岩	四区 混貝土層	破損品
同図 8	敲 石	楕円形 刃部形態	120cm	74cm	53cm	砂岩質	三区 貝層	完形品
同図 9	錘 ?	偏平で四 角形	57cm	51cm	16cm	—	表土	完形品

貝製品

第3図が出土した貝製品である。シャゴウおよびリュウキュウサルボウの殻頂に孔をあけたものが三個出土している。そのうち1点が同図2である。同図1は小形の匙状の貝器で表土から出土し全体がよく磨滅している。用途は不明。同図3は、シャコ貝で作った匙状の貝製品で五区の貝層中より出土。最大長136cm、最大幅100cm、全体に磨滅の跡が見られる。用途について報告書では鋏であろうかと記述している。

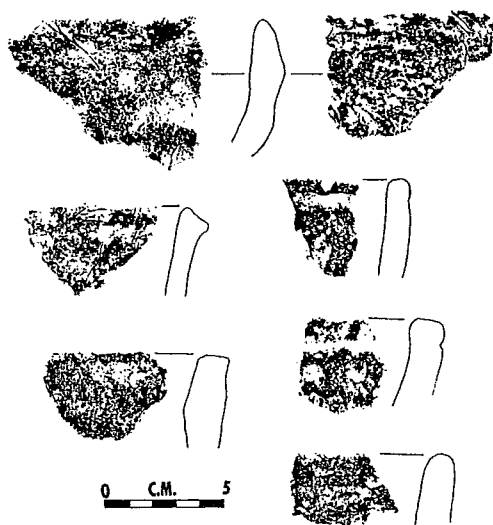


第3図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の貝製品
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)

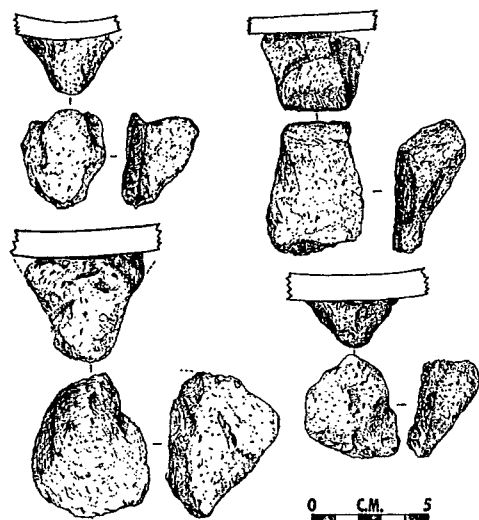
土器

土器の破片は、口縁部10個、胴部92個、底部2個で合計104個出土した。復原して器形のがえるものはなかった（第4図）。その他、口縁部に付けられたと思われる把手が4個出土している（第5図）。

土器の胎土には、砂、石英、サンゴ礁の微細な粒子が多く混入し、焼成は不良で脆く、吸水性强い。焼色は暗褐色、茶褐色、黒褐色。土器の厚さは胴部で9～20cmに亘るが、平均の器厚が15cmで、いったいに口縁部を薄くし、胴腹部において厚くしている。文様のあるものは見あたらなかった。



第4図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の土器
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)



第5図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の土器把手
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)

E. ジョージH・ケアの波照間島調査

1960年（昭和35）～1962年（昭和37）の3ケ年にわたりジョージH・ケアを中心に琉球列島遺跡調査が実施された。この時に沖縄各地の遺跡で収集された陶磁器類は「ジョージH・ケアコレクション」として沖縄県立博物館に現在保管されている。

1980年の9月、沖縄県立博物館では過去の琉球列島遺跡調査の再確認調査という目的でジョージH・ケア氏を招聘した。そして、氏の来島をきっかけにこれまで収蔵庫に眠ったままになっていた陶磁器資料の整理と実測図作成を行い、その成果を『沖縄出土の中国陶磁（上）－先島編－』（1982年3月発行^⑧）、『沖縄出土の中国陶磁（下）－沖縄本島編－』（1983年3月発行^⑨）上下二冊にまとめ刊行している。

ジョージH・ケアが実際遺跡を踏査して遺物を採集した場所を列挙すると次のとおりとなる（括弧内の遺跡名は現在の遺跡分布地図に登録された遺跡名である）。

Atanshi（美底御嶽周辺遺跡）、Atanshi Outlyers（美底御嶽周辺遺跡）、Hokaburaku（保多盛御嶽周辺遺跡）、Kaanchi（伝ミシュク村跡遺跡）、Maeburaku（大底御嶽周辺遺跡）、Minamiburaku（新本御嶽周辺遺跡）、Mishuku（伝ミシュク村跡遺跡）、Yagumura（伝ヤグ村跡遺跡）、Nanatabaru（下田原貝塚）、Pemisku（伝ペミシュク村跡遺跡）、Sumda Castle（下田原城跡）、Unidentifiedsite（場所不明）、Utsomura（伝ウツオ村跡遺跡）。

F. 沖縄県教育庁文化課による遺跡詳細分布調査

沖縄県教育庁文化課では1979年（昭和54）5月1日～1980年（昭和55）3月20日までの日程で竹富町・与那国町所在の遺跡詳細分布調査を実施した。この時の調査では波照間島の調査も行われ、島内で16箇所の遺跡が報告された。調査の成果として、遺跡の概要と遺跡の範囲が1980年3月発行の「竹富町・与那国町の遺跡」に報告されている^⑩。波照間島の遺跡については阿利直治が担当してまとめている。

G. 沖縄県教育庁文化課による下田原貝塚・大泊浜貝塚の発掘調査

団体営圃場整備事業の実施に伴い下田原貝塚と大泊浜貝塚の範囲確認調査が沖縄県教育庁文化課によって実施された。調査は1983（昭和58）年度から1985年（昭和60）年度まで3次にわたって行われた。第1次の発掘調査は1983年9月5日～11月5日まで大泊浜貝塚の発掘調査、第2次発掘調査は1984年5月28日～8月7日、第3次発掘調査が1985年7月15日～8月25日の期間であった。第2次と第3次の調査では主として下田原貝塚の発掘調査が行われた。発掘調査の成果は、調査を担当した金武正紀・金城亀信によってまとめられ、沖縄県文化財調査報告書第74集『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘

調査報告一』として1986年3月沖縄県教育委員会から刊行されている^⑧。

主な調査成果については次のとおりである。

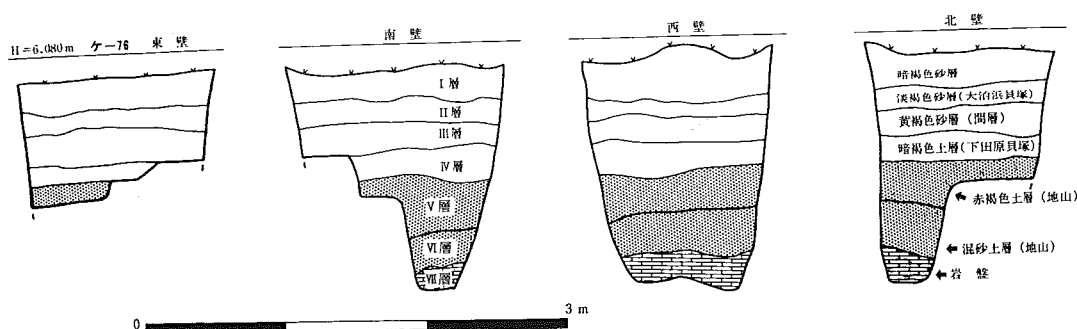
下田原貝塚の主な調査成果

①有土器が無土器に先行することを層位的に確認することができた。

有土器が無土器に先行することは、1978年石垣市名蔵大田原遺跡の発掘調査でも金武正紀らによって確認されていたが^⑨、今回の調査でもそのことが再確認されることになった。

有土器の下田原貝塚の層が無土器の大泊浜貝塚の層の下位にもぐり込んでいる状況はとくに下田原貝塚と大泊浜貝塚が接するケー76の発掘区の層序で顕著に見られ、しかも、下田原貝塚層と大泊浜貝塚層の間には間層として無遺物の砂層が挟まれおり、両者の間には時間差があることも確認された。このような状況は他のG-35の試掘グリット等でもおさえられている。

では、ケー76の層序断面図を報告書から掲載し詳しく見ることにしよう（第6図）。



第6図 下田原貝塚（Ⅳ層）と大泊浜貝塚（Ⅱ層）が接するケー76の発掘区の層序
（金武正紀ほか『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』沖縄県教育委員会、1986年より）

第Ⅰ層 暗褐色砂層で、層厚が20～30cm。耕作で攪乱を受けている。

第Ⅱ層 淡褐色砂層で、層厚が10～15cm。貝殻や獣魚骨が混入しているが、土器は出土しない。大泊浜貝塚の西端部と考えられる。

第Ⅲ層 黄褐色で、層厚が15～20cm。遺物を包含しない無遺物層の間層である。

第Ⅳ層 暗褐色土層で、層厚が15～25cm。砂の堆積が始まる前の層。この層には下田原式土器や貝殻・獣魚骨・礫などが包含しており下田原貝塚の層である。

第Ⅴ層 赤褐色の地山で層厚が25～40cm。

第Ⅵ層 赤黄褐色混砂土層で層厚30～40cm。遺物を含まない層である。

第Ⅶ層 淡黄色の砂質石灰岩で岩盤。

②遺構について

- 柱穴が検出されたが、明瞭なプランはつかめてないが平地住居跡の可能性が強い。
- 炉跡が6つ検出されている。そのうち第5号炉跡は長径約170cm、短径約90cmの楕円形、鍋底状に約10cm掘りくぼめられていた。6つの炉跡とも屋内炉か屋外炉かはつきりしなかった。
- 溝状の遺構が全長36m確認。排水的機能を有していたと考えられるが、今後の資料をまちたいと調査者は記述している。

③出土遺物について

- 土器：全て下田原式土器（口縁部64個、把手13個、底部11個、胴部858個）が出土した。下田原式土器の主な器形－底部角が丸味をもつ平底で、胴部が膨らみ、胴部から口縁部へと内彎し、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢。
把手は牛角状把手が主体であるが僅かに横長把手もある。
有文土器は細沈線文1点だけの検出。
- 石器：石斧・石製利器・磨石・凹石・石皿・砥石・敲石・円盤状製品等総数207点出土。
- 骨・牙製品：総数で72点出土している。
- 貝製品：実用品・装飾品のほか二枚貝有孔貝製品等総数200点出土。
- 食料残滓：出土数が多い貝殻はチョウセンサザエ・シラナミガイ・マガキガイ・シレナシジミ・ヒメジャコ・サラサバティ・ヤコウガイ等。
脊椎動物の遺存体は魚骨・獣骨が多く、なかでもイノシシは多かった。イノシシの最小固体数283、これから1m²あたりの分布密度は0.992である。鳥類にはアホウドリ・カラス等のほかミズナギドリ目、チドリ目などと思われる海鳥の骨があった。
哺乳類にはオオコウモリ・クジラ類・ネズミ類・ジュゴン等がある。
- 木炭やシャコガイを使った放射性炭素による年代測定結果
シー58 第Ⅲ層（貝殻） 3660±70yB・P・（3550±65y B・P）
シー58 第Ⅲ層（木炭） 3740±85yB・P・（3630±80y B・P）

大泊浜貝塚の主な調査成果

- ①波照間北海岸の西端部、標高8mの砂丘で北側20mには珊瑚礁の発達した遠浅の海が広がる。下田原貝塚に隣接し、一部重複する。
- ②発掘によって1点の土器も発見されないことから無土器の貝塚である。
- ③第3層から3体の埋葬人骨が検出された。いづれも副葬品はなかった。検出された層

位は第3層の中位から第4層の上位まで掘り込んだ穴に埋められており比較的新しい人骨（12世紀以後）と思われると発掘担当者は記述している。

長崎大学医学部内藤芳篤教授の所見では成人男性2体、女性1体の合計3体。推定身長は男性160～161.5cmで比較的高い。

④第4層の無土器の層から白磁玉縁碗、白磁端反り碗、須恵器壺、滑石製石鍋、褐釉陶器壺、鉄鑿が出土。陶磁器の年代観が12世紀に編年される。

⑤礫床住居跡、炉跡遺構が検出された。礫床住居跡は3基検出された。第1号礫床住居跡は東側の一辺が約2.2m（一部の検出）。第2号礫床住居は約2.5m×3.0m、第3号礫床住居跡は、約2.5m×2mの方形である。

礫敷きの炉跡が2基と砂面上の炉跡が1基検出された。

⑥石器は石斧6点、敲石1点で石器が少ないのがこの貝塚の特徴である。

⑦鉄鑿が1点出土した。長さ17cm、基部は正方形で最大厚が約1.5cm、刃部は片刃に近い両刃状を呈していて最大幅が約2.5cmを測る。

⑧食糧残滓：貝類遺存体は60種。河川貝であるシレナシジミも出土している。

脊椎動物遺存体は391個の破片が出土。ヘビ目の脊椎骨79点。鳥類48点。哺乳類はコウモリが最小個体数11個、ネズミ2個体。イノシシの骨の破片総個体数9651個。食糧残滓のなかで最も多い出土量（全体の87.6%）である。

⑨木炭による放射性炭素の年代は次のとおりである。

D-22第6層 1350+75y B・P (1370+75y B・P)

D-22第10層 1770+70y B・P (1720+65y B・P)

G-22第11層 1560+70y B・P (1510+70y B・P)

H. 県教育庁文化課による八重山諸島地域におけるグスク跡（スク跡）分布調査

沖縄県教育庁文化課では1990（平成2）年度から1993（平成5）年度までの4年間国庫補助を得て八重山諸島地域におけるグスク分布調査を実施した。調査成果は1994年（平成6）3月『グスク分布調査報告書Ⅲ－八重山諸島－』として沖縄県教育委員会から刊行されている^⑩。

波照間島の調査は下田原城跡・伝マシユク村跡遺跡・伝ペミシユク村跡遺跡の三箇所行われている。報告書には豊見山禰の分担執筆で石垣遺構の略図と遺跡の概要が記されているが、石垣の墨線だけが描かれているため地形との関係がつかめず縄張図としては不備が多い。せっかく予算を使って雑木の伐採や試掘調査を行っているにもかかわらずあまりいい成果が得られてないのは惜しまれる。

1. 国立歴史民俗博物館による村落調査

国立歴史民俗博物館は、1993（平成5）年度より「特定研究 奄美・沖縄の文化とその展開」の一部として3年間にわたり八重山における村落遺跡調査・測量を実施してきた。その中の波照間島調査に限っていえば、1993（平成5）年度にマシュク村跡遺跡の測量調査を実施し、さらに1995（平成7）年度ブンヤー遺跡の測量調査のほか二遺跡の測量調査を行っている。そして1997年（平成9）6月1日には、これらの調査をもとにして石垣市を会場に「再発見・八重山の村」というテーマで第25回歴博フォーラムが開催された。フォーラムでは国立歴史民俗博物館の小野正敏が波照間島のマシュク村や竹富島のハナスク村・クマーラ村・シンザト村等の測量調査をもとに、これらの村のありようと発展段階について次のようにまとめている^⑥。

①道路がないこと、また、石垣の屋敷割りは方形ではなく、不整形で不均質の屋敷が細胞群のように連結し、石垣を狭く切った出入口によって屋敷から屋敷へと連続しているのが特徴である。

②これらの村の多くは、海岸に面した隆起珊瑚礁の崖上や島の中を走る亀裂の崖上に立地するという共通の特徴をもっている。

③崖上に積まれた石垣の規模が大きいことは崖と村を囲う石垣の意味の重さを示唆し、外からの視線を強く意識していて海から見る者に、村全体を石垣で囲う防御された村のイメージを強くする。

④これらの遺跡から採集される陶磁器はいずれも14世紀後半から15世紀のものである。さらにまた、発見される陶磁器から村の発展段階については大きく4段階に分けられるという。すなわち、Ⅰ期が12世紀末～13世紀、Ⅱ期が14世紀後半～16世紀始め、このⅡ期に石垣の屋敷割りが出現するが、道路がない村である。また、村の立地として現集落に近い村と現集落から離れた崖上の村とがある。Ⅲ期は、17、18世紀の近世陶磁が拾える遺跡であるが、その構造については不明である。波照間では現集落の近くに少しずつ存在したらしい。Ⅳ期が現在の集落に連続する村で道路と石垣で区画された村である。

なお、マシュク村等の崖上の石垣で囲われた村は、15世紀後半から16世紀初めに移動廃絶しているとも述べ、特に14、15世紀に村が防御される理由は二つ予測されるとして、「倭寇と琉球王府の南進に伴う緊張」だとしている^⑦。

以上、国立歴史民俗博物館の調査についての報告書はまだ刊行されていないが、フォーラムという形でその成果の一部が公表されており、波照間の中世期の村を考えていくうえで私たちに多くの示唆を与えてくれている。

J. 波照間島における考古学上の遺跡の概要

1979年から1980年にかけて沖縄県教育庁文化課が実施した遺跡分布調査では、島内で16遺跡が報告されている。今回の調査で新たに数カ所の遺跡を追加することができた。以下これまで知られている遺跡の概要を記すことにする。

下田原貝塚

前述したように金関チームと早稲田大学の八重山調査団によって発掘され、その時に出土した遺物はすでに報告されている^⑧。1956年（昭和31）10月19日に県の史跡として指定された。現在は、荒地として放置されている。原名が示すとおりかつては水田があったところで、近くには湧水源も認められる。

大泊浜貝塚

下田原貝塚の東に隣接する砂丘遺跡である。海に面して発達する砂浜は大泊浜（島の人たちはブドゥマイパマと呼ぶ）といい、遺跡名はその浜に由来している。遺跡が立地する砂丘の大きさは標高6～8m、長さ約150m、幅50m程の小規模のものである。一部下田原貝塚と重なっているために両遺跡が別々のものだという認識だったのが、1982年阿利直治の精査によってはじめて無土器文化に属する貝塚だということが確かめられた^⑨。なお、発掘調査による地形復元の結果では、貝塚形成の初期まで下田原貝塚の高い位置（標高約8.5m）との比高差が3～4mあっただろうといわれている。遺跡の内容については前項を参照。

下田原城跡

下田原貝塚の南後方の石灰岩台地の縁辺に3～4mの断崖を利用して築かれている。標高25mを測る北西向きの急峻な崖を背にして築かれた石塁は、比高約3～4mも残るところがあり、最高所の「物見台」、窪んだ石室風の「兵器庫」と伝える遺構、各曲輪をつなぐ虎口、そして北側の崖下に井戸跡と思われる遺構が明瞭に残っている。遺跡内からは15～16世紀に属する貿易陶磁器が採集される。なお、「物見台」の石垣の上からはフィゴの羽口と鉄滓が得られた。かつてブリブチ公園として島の老人会によって整備されていたが、現在は荒れ放題になっている。「日本再南端の島々に位置し、戦災や後世の改変を受けずにきわめて良好に保存されてきた城跡であり、琉球が統一国家を形成するという歴史上重要な時期の様相を明らかにする上で貴重な遺跡である」として国の史跡に指定すべく文化財保護審議会から答申を受けたが、一部地主の同意が得られないまま現在まで指定作業が進んでいない。

伝マシュク村跡遺跡

タカッチと呼ばれる島の北海岸にある。通称マシュク山と呼ばれる海岸べりの切り立つ断崖の上に築かれた遺跡で海を意識して高い石塁をめぐらしている。石塁の石垣の高さは海に面したところで最も高く平地との比高差約2.5 m～3 mある。リーフの切れ目に向かった所に虎口があり、その左右には高い石垣を築き相横矢が掛かる仕掛けになっている。細胞群のように連結した石塁の中や石垣の上から貿易陶磁器や八重山式土器の破片が採集される。なお、国立歴史民俗博物館では250分の1の遺跡測量図を完成させている。

伝シムス村跡遺跡

伝マシュク村跡の東方に連続する遺跡である。伝承ではシムス村があったとされ、シムスケーと呼ばれる井戸が現在でも残存する。この井戸をほぼ中心にして琉球石灰岩の石塁遺構が見られる。貿易陶磁器と八重山式土器が採集される。

伝ウツォウ村跡遺跡

南部落の南側に連続する畑地一帯から貿易陶磁器や八重山式土器が採集される。伝承によれば付近一帯にウツォウ村があったと言われている。遺跡の名はそれに由来する。現在圃場整備事業が進行し、遺物はほとんど採集されない。

伝ヤグ村跡遺跡

保多盛御嶽周辺遺跡の西に隣接する。この付近にはかつてヤグ村があったといわれ、現在でも当時の井戸や屋敷囲いの石塁等が僅かに残存する。井戸を中心とした周辺の畑・山林などから貿易陶磁器や八重山式土器が採集される。現在、大掛かりな圃場整備事業の進行により付近の地形は一変し、表面踏査での遺物採集は困難となった。なお、「南波照間伝説」で有名な村はこの遺跡周辺に展開していたヤグ村だったといわれている。

伝ペミシュク村跡遺跡

外部落の東南約600mに位置し、ほぼ東西に走る琉球石灰岩の亀裂の崖上に立地する。崖上を上手く利用しながら琉球石灰岩の岩塊を積みあげた石塁遺構を内容とする遺跡で、この石塁遺構を中心とする一帯にはかつてペミシュク村があったと伝承されている。遺跡の名はその伝承に由来する。現在、圃場整備事業によって周辺の前野や畑が改変され、圃場整備された畑地の中に石塁遺構のみぼつんと残された状態である。圃場整備以前には周辺の畑地から貿易陶磁器や八重山式土器が採集された。

石塁は外からの視線を強く意識して築かれており、石垣の上には武者走り状になってい

るところも見られる。

伝ミシュク村跡遺跡

島の西北端の海岸砂丘上に形成されて遺跡で細胞群のように連結した石塁遺構を内容とする。近くの手はリーフの切れ目が入っており、一時期艇船等が停泊したという。伝承ではミシュク村があった場所とされ、遺跡名はその伝承に由来する。遺跡全体がハスノハギリの群落に覆われていて日中でも薄暗い。石塁内には数箇所の拝所とミシュクケーと呼ばれる井戸が見られる。遺跡を区切る南側には涸れ川となった窪地が内陸から海に向かって細くのび、石塁群を区画する障壁の役目をなしている。なお、この窪地の南に展開する海岸部は砂丘を形成しているが、この砂丘地の採砂の際人骨が出土した。その時に掘り出された人骨は幸いコンクリート製の仮墓（毛原第一墓と呼ぶことにする）を作って納骨されていたため保存状態が良好であった。現在これらの人骨については琉球大学に運ばれ土肥直美助教授によって整理が行われている。人骨等の調査概要については別項を参照。

美底御嶽周辺遺跡

北部落の美底御嶽を中心とした直径150m四方の範囲において貿易陶磁器や八重山式土器の散布が見られる。先のジョージH・ケアー氏の調査ではこの遺跡をアタンシおよびアタンシ近辺と呼称されていて、多量の貿易陶磁器が採集されている。『沖縄出土の中国陶磁器（上）』には、アタンシおよびアタンシ近辺の採集遺物の実測図が15頁にわたって掲載されている。現在、これらの貿易陶磁器はジョージH・ケアーコレクションとして沖縄県立博物館に収蔵保管されている。コレクションを整理した亀井明德氏は「元後半から明代前半期に位置づけられるものが大半を占め、これにつづく明中期のものを若干含んでいる^⑧」と所見を述べている。

現在、この遺跡周辺は農地改良や東京オリンピックの際の採火記念碑の建立等によって土地が改変され、地上での遺物採集は困難になっている。

北部落内遺物散布地

北部落内の北西隅にあたる付近で中心部が現在の民家の屋敷地と重なっている。美底御嶽周辺遺跡に近接していることからそれに連続する同一遺跡の可能性もある。

新本御嶽周辺遺跡

新本御嶽の前庭部や御嶽に隣接する民家の屋敷囲いの石垣および道路上で貿易陶磁器や八重山式土器等の遺物が採集される。

大底御嶽周辺遺跡

前部落と南部落に挟まれた大底御嶽を中心にして御嶽の石塁内および周囲の畑地から貿易陶磁器や八重山式土器等の遺物が採集される。御嶽内の石塁は琉球石灰岩の岩塊を幅約1m、高さ約80～90cm程に積み上げたもので、石積み形態は全て野面積みになっている。この石塁の一角には、四枚の盤石を四角に組み合わせてつくった井戸枠を有する井戸が二箇所存在する。なお、道路を挟み南向かいのアカハチ生誕地と呼ばれる小高くなったところまで遺物の散布がみられるが、ここには特に「伝オヤケアカハチ生誕の地」という遺跡名を冠し、遺跡名が区別して呼称されている^②。

伝オヤケアカハチ生誕の地

前述したように大底御嶽周辺遺跡とは道路を挟んで南に隣接する。標高約40mを測り、島内でも高い位置にある。周辺との比高は約1～2m程でやや小高い丘の上に営まれている。現在、野菜畑になっているが、耕作の際に貿易陶磁器や八重山式土器等が露出することから遺物包含層は比較的上位にあるものと判断される。竹富町指定の史跡である。

名石御嶽周辺遺跡

遺跡は名石御嶽の境内から西側にかけて広がり、アサゴ山と呼ばれる微高地付近が境界となる。屋敷地の野菜畑や道路および屋敷囲いの石垣の中から貿易陶磁器や八重山式土器等が採集される。アサゴ山の微高地には琉球石灰岩の石塁遺構が確認されるが、全体がブッシュに覆われ調査困難で未調査になっている。一説にはカンツアズマナグという豪族が居を構えていた場所だともいわれている^②。

イナサイ遺跡

島の西方、通称イナサイと呼ばれる海岸を中心とする一帯に広がる遺跡である。集落から波照間島港に通ずる道路によって遺跡が分断され、工事の際その断面より貿易陶磁器や八重山式土器等が出土した。時代は不詳だがこの付近の海岸にフィリピンから来た人々が居住していたという伝承がある^②。

保多盛御嶽周辺遺跡

外部落の西端にある保多盛御嶽や保多盛家の屋敷地およびその周辺の畑地に形成された遺跡であり、貿易陶磁器や八重山式土器が採集される。20数年前までは、畑の耕作等によって露出した貿易陶磁器が畑の畦や御嶽の石垣などに積みあげられていたが、圃場整備が進行した現在表面踏査では遺物の採集がほとんどできない状態である。

その他の遺跡

その他にも隆起珊瑚礁の崖上や断層活動によって生じた亀裂の崖上等に築かれた石塁遺構を内容とする遺跡が存在する。ペミシュク、庸原ブシャー、クッシアジマグ、ボッシュ、キャバルヤマ、ナッツアブヤーと呼ばれているのがそれである。いずれも英雄伝説と結びつき、遺跡内やその周辺から八重山式土器とともに14～15世紀頃の貿易陶磁器が採集される。

現在、遺跡自体深いブッシュに覆われているため中に踏み込んで石塁遺構の全体像をつかむのになかなか容易でない。したがって今回は、島内で伝承されている名称を付して地図上にプロットしておくにとどめた。

なお、これらの遺跡については農地開発によって破壊される危険があり、できるだけ早い時期に石塁遺構の測量調査を中心とする学術的な総合調査を行う必要がある。

おわりに

波照間島での考古学的調査は、八重山考古学のなかで一つのエポックとなる調査が多かった。金関丈夫チームの調査成果は沖縄の起源論争を生み、その後の早稲田大学調査団や沖縄県教育庁文化課による発掘調査は八重山考古学研究を進展させる上で大きな転機をつくった。考古学研究者にとって波照間島はまさに学問的魅力的な多い島なのである。

おわりにあたって、波照間島における先史時代の素描を試みることにしよう。

これまでの考古学上の成果をふまえると、波照間島に最初に人間が住み着いたのは今からおよそ3千7、8百年前のことであった。この時代の人々は島の北海岸、比較的水が得やすく海に面した下田原というところにそのコロニーをつくっていた。彼らが残した生活の痕跡が下田原貝塚であり、貝塚形成の状況からは長期にわたって定住生活をして様子がよくわかる。また、発掘された柱穴の状況から彼らの住居が簡素な平地式住居だったことも確認されている。

生活に必要な容器は、底部のすみっこが丸みをおびる平底で、胴部がふくらみ、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢である。そして、口の近くに牛角状把手のついたのが特徴的である。考古学研究者たちによって下田原式土器と名付けられたこの土器のルーツについては、沖縄や本土といった北の文化には見られない独特な特徴を有していることから南の方につながる土器だと考えられている。ところが、具体的にどこの土器かというところその祖型については全く謎に包まれている。つまり、波照間島に最初に定住した人々のルーツについては、ただ漠然と「南方系」だということだけで、その他のことについてはほとんどわかっていないというのが実情である。

下田原貝塚人たちは土器ばかりでなく、石、骨、貝で作った利器を数多く残し、かなり

進んだ石器・骨器・貝器文化を有していたことが裏付けられている。石器については25kmも離れた西表島に原料を求めており、舟を操り西表島との往来が頻繁だったことがわかっている。また、貝塚からは食料残渣としてのイノシシの遺存骨が大量に発掘されているのも興味を引く。現在の波照間島にはイノシシはいないが西表島には多く棲息している。石器の材料が西表島から求められたようにイノシシもまた西表島から持ち込まれたのであろう。下田原貝塚出土のイノシシの骨について研究した金子浩昌は、下田原貝塚出土のイノシシのうち1.5才以上が67.6%を占めていることから「若し、イノシシの飼育という問題があったとすれば、1.5才未満の個体が最も多くなるのではないかと思われる」と述べ⁹⁾、イノシシの飼育に否定的見解をとっている。イノシシが石器の材料と一緒に西表島から運び込まれた可能性は高い。

下田原貝塚人がいなくなった後も海岸から吹き上げられる砂は年々厚く堆積し、やがて付近一帯に砂丘が形成するようになる。この砂丘上に今から千五・六百年前人間が住み着くようになった。大泊浜貝塚人の登場である。彼らが生活したあとの痕跡は、下田原貝塚東隣りの大泊浜に貝塚として残されている。

大泊浜貝塚人たちはこの砂丘を中心にして比較的長期にわたって生活していたたようである。発掘調査では砂丘の形成と貝塚形成が何度もくりかえされていった様子が確かめられている。大泊浜貝塚人のG-22という発掘区では第1層から第21層までの層序が確認され、地表面から約3.4mの深さに達していることがわかった。その間の時代幅は、C₁₄年代の結果によるとおよそ4～12世紀に相当する。

大泊浜貝塚は無土器の貝塚であり、無土器文化の特徴を有する新石器無土器時代の人々が残した貝塚である。人類発展史の上でみると、無土器の時代から有土器の時代へというコースをたどるというのが一般的な見方である。そのことからすれば、この大泊浜貝塚の事例はきわめて特異な現象だといえることができる。なお、こういった先史文化の特徴は宮古・八重山先史文化全般に見られ、波照間島だけに限ったことではない。

ではここで新石器無土器時代の特徴点について少し触れることにしよう。

この時代に属すると考えられる遺跡は現在のところ30数遺跡が知られている。宮古・八重山地方に限定され沖縄本島以北にはおよんでない。現在、そのうちの9遺跡が調査済

高宮廣衛による八重山地方の考古編年

歴 (原) 史 時 代	川平貝塚文化	後期 { パナリ焼 中森式土器 前期 { ビロースク式土器 新里村式土器
		↑
先 史 時 代	?	名蔵貝塚文化 (貝弁) 仲間貝塚文化 (石弁)
	(仲間第二式土器) 下田原式土器	↓ 仲間貝塚文化 (無土器文化)
代	下田原貝塚文化 (有土器文化)	

高宮廣衛「八重山考古学研究略史」
陳奇祿院士七秩榮慶論文集、1992年より

みである^②。高宮廣衛はその調査成果をもとにして、無土器文化には石斧を主体とする石器文化（仲間貝塚文化）と貝斧を多く出土する貝斧文化（名蔵貝塚文化）の2種の異なる文化が含まれているとし、そして、後者が新しく前者は古いと考え、前表のような八重山考古学上における文化推移のモデルを考えた^③。大泊浜貝塚の場合にはこのモデルでみると石器文化（仲間貝塚文化）に相当することになる。

大泊浜貝塚は前述したように4～12世紀の文化を包含する貝塚であるが、その上層の第4層からは薄手の白磁玉縁碗、薄手の白磁端反り碗、カムイ焼、九州産滑石製石鍋、鉄鑿等が共伴して出土した。発掘担当者は陶磁器の年代観からほぼ12世紀頃に納まるものとの認識を示している。

以上の考古学的成果をふまえると、12世紀頃の波照間島は土器の無い時代であるが、鉄器や貿易陶磁器はすでに島内に入っていて、九州産の石鍋やカムイ焼等も流通していたことになる。石鍋は滑石という蠟に似た軟らかい石をくりぬいて製作した鍋で、保温性にすぐれている。カムイ焼は徳之島で焼かれた青灰色の焼物でトカラ列島から波照間島、与那国島まで広く琉球一円で発見され滑石製石鍋とはセットで発見されることが多い。石鍋は、九州での当時の相場で石鍋四個で牛1頭に相当する値で取引されており相当高価な品であった^④。おそらくカムイ焼なども当時としては高価な品であったのであろう。こういった石鍋やカムイ焼、あるいは鉄器、貿易陶磁器等は商品として流通したものである。これらの品々が遺物として大泊浜貝塚から出土するのである。では、こういった商品がどういう経路で誰によって波照間島まで運ばれてきたのだろうか。

この頃の東アジア情勢は中国の海洋商人たちを中心とする自由な海外貿易の隆盛期を迎えており、その余波は南の小さな島々まで押し寄せていたと思われる。大泊浜貝塚から出土する鉄器、貿易陶磁器、カムイ焼、滑石製石鍋のほか、石垣市の崎枝赤崎貝塚や西表島の仲間第一貝塚などから発見された開元通寶等もこの東アジアの大きなうねりのなかでもたらされたものと考えることができる。

註

①鳥居龍蔵「琉球二於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』94号、1894年

②金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」

『水産大学校研究報告人文科編』9号、1964年

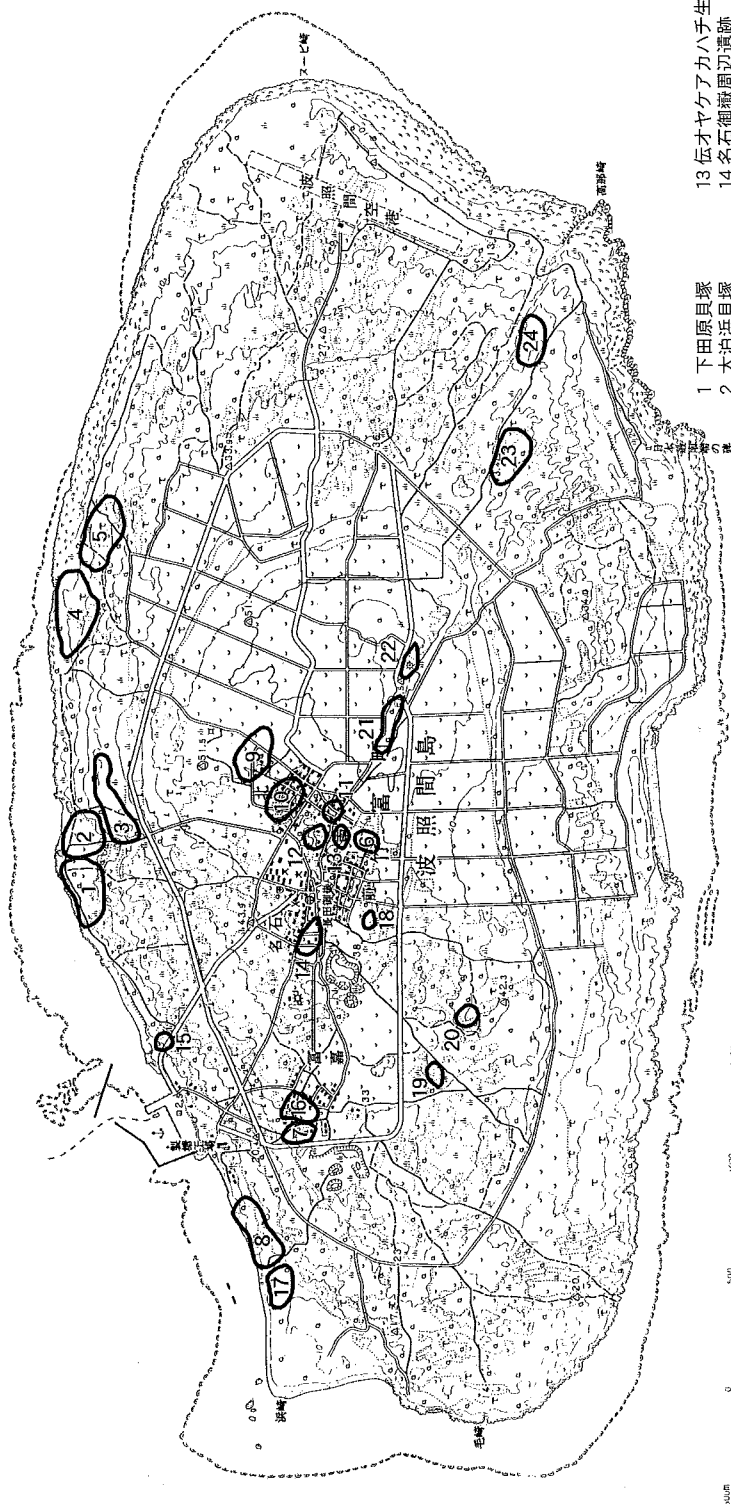
③金関丈夫「八重山群島の古代文化—宮良博士の批判に答う—」『民族学研究』19巻2号、1955年

④金関丈夫「波照間—琉球通信4—」『朝日新聞』西部版 1954年4月14日号

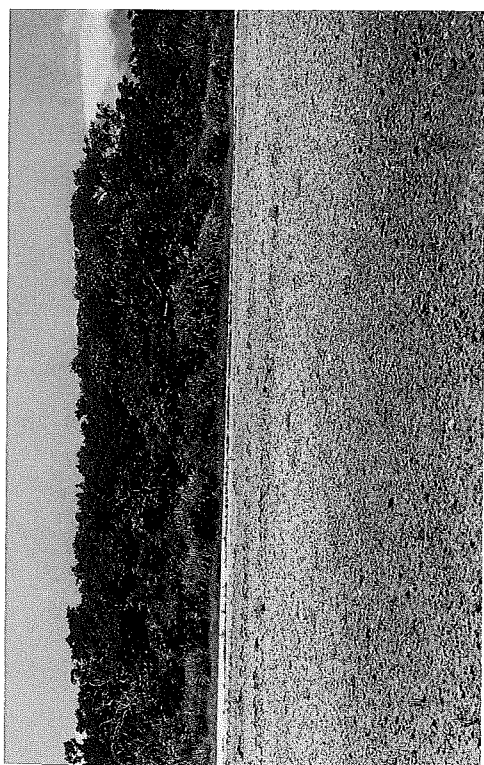
⑤前掲書③

- ⑥金関丈夫・国分直一「琉球波照間島下田原貝塚調査報告」『東京人類学会・日本民族学協会聯合大會記事』9号、1955年
- ⑦前掲書②
- ⑧多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『1956年度版文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会、1956年
- ⑨滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年
- ⑩ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇『沖縄出土の沖縄陶磁（上）－ジョージH. ケア氏調査収集資料－先島編』沖縄県立博物館、1982年
- ⑪ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇『沖縄出土の沖縄陶磁（下）－ジョージH. ケア氏調査収集資料－沖縄本島編』沖縄県立博物館、1983年
- ⑫岸本義彦ほか『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第29集 沖縄県教育委員会、1980年
- ⑬金武正紀ほか『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第74集』沖縄県教育委員会、1986年
- ⑭金武正紀ほか「大田原遺跡」『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖縄県教育委員会、1980年
- ⑮大城慧ほか『グスク分布調査報告書（Ⅲ）－八重山諸島－』沖縄県文化財調査報告書第113号 沖縄県教育委員会、1994年
- ⑯『第25回歴博フォーラム 再発見・八重山の村』国立歴史民俗博物館、1976年
- ⑰前掲書⑫
- ⑱前掲書⑨
- ⑲前掲書⑬
- ⑳亀井明德「先島諸島採集の輸入陶磁器」『沖縄出土の沖縄陶磁（上）－ジョージH. ケア氏調査収集資料－先島編』沖縄県立博物館、1982年
- ㉑前掲書⑫
- ㉒加屋本正一『波照間島』1978年
- ㉓宮良高弘『波照間島民俗』叢書わが沖縄、1972年
- ㉔高宮廣衛「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』No.14 沖縄考古学会、1994年
- ㉕高宮廣衛「八重山考古学研究略史」陳奇祿院士七秩榮慶論文集、1992年
- ㉖森田勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」佛教藝術148号、1983年

波照間島の遺跡分布図



- | | |
|--------------|-----------------|
| 1 下田原貝塚 | 13 伝オヤケアカハチ生誕の地 |
| 2 大泊浜貝塚 | 14 名石御嶽周辺遺跡 |
| 3 下田原城跡 | 15 イナサイ遺跡 |
| 4 伝マシユク村跡遺跡 | 16 保多盛御嶽周辺遺跡 |
| 5 伝シムス村跡遺跡 | 17 毛原第一墓 |
| 6 伝ウツオウ村跡遺跡 | 18 毛原第一墓 |
| 7 伝ヤグ村跡遺跡 | 19 ベミシユク |
| 8 伝ミシユク村跡遺跡 | 20 庫原フシヤ |
| 9 美底御嶽周辺遺跡 | 21 クシシマジマ |
| 10 北部案内遺物散布地 | 22 ポツシユ |
| 11 新本御嶽周辺遺跡 | 23 キヤバルヤマ |
| 12 大底御嶽周辺遺跡 | 24 ナツツアブヤ |



図版1 クッシアジマグ (雑木林の中に石罫遺構がある)



図版2 クッシアジマグの石罫遺構



図版3 キャバルヤマ (このブッシュの中に石罫遺構がある)



図版4 キャバルヤマの石罫遺構



図版 5 ギャバルヤマの石塁遺構



図版 7 ペミシユクの石塁遺構



図版 6 土地改良区の中に残されたペミシユク
(中央の雑木林の中に石塁遺構がある)



図版 8 ナツァブヤー (この雑木林の中に石塁遺構がある)